十月総評　立花開

ヒヤシンス同士だったと思います　松下　誠一　東京都

事が済んだ後の状態らしい。事情聴取のような語り口で、説明をしてるようで何もわからないのが面白い。その場で何が起きたのだろう。どんなに惨たらしい状態となっていても、ヒヤシンスの香りが甘く残っている。

シャンデリアの
ような腹痛抱え昼寝　吉沢　美香　宮城県

月経痛だろうか。痛みや必要なものと強制され、捨てることも叶わない苛立ちが複雑に絡み合う様は、たしかにシャンデリアのようだ。そんなものが腹部に入っているのは嫌だけれど。作者にしては珍しい大胆な字余りも、下へ下へ落ちていくささくれ立った心そのもの。

死ぬことについて話さない犬の目　池田　彩乃　青森県

目が語る、とはよく言ったもので、言葉を持たないものたちの感情も目を見ればわかるのだ。死については何の想いも浮かべないのは、死を知っているからか。語り尽くされるより、想いを湛えた眼で見つめられるほうが、心に刺さる。

迷子ならできる　心中ならしない
あなたの森で担ぐ猟銃　青粒　神奈川県

今、共にいることはできても、生涯を共にはできない。そんな対象のあなただが、今はあなたの森にいる。けれど、「しない」という強い意志を保てるのだろうか。猟銃を使う対象は、自分自身の愛かもしれない。心とは、ままならないものだから。

チカチカのチは点でカは滅である
来世は雪になる信号機　ムクロジ　群馬県

そういわれると、「チカチカ」の文字だけが喧しく感じてしまって面白い。雪も降るときは柔らかく点滅しているようにも見える。現世では信号機から雪に変わることなんてまずできないけれど、その共通箇所を心の縁として、信号機の長い一生は過ぎていくのだろう。

くるんだ安寧の横で
ほおずきだけが
紅くなる

咲谷　みわ　福井県

ほおずきの紅が、良い変化ならいいのだけれど。安寧とは、くるみ覆い隠すことで守られるものではない。変化に気が付かず、守っているから大丈夫と思い込んでいるうちに手遅れなほど紅く熟してしまっていたら。「だけ」に浮かび上がる陰りを思う。

何もかも
手遅れになった人生を
ランプなびかせ
走る走る走る

伊東マンション　東京都

スタートから走るほうがいいに決まっている。そんなこと誰もが知っている。けれど、既に始まっていることに人は何故か気付けない。手遅れだと思っても、夜に残像として残るランプの灯りの美しさこそ人生であると分かっていれば走り続けることはできる。

地下鉄の水買う打ち明けたいこと
がある

森　榮太　東京都

「地下鉄の水」とは自動販売機の水だろうが、絡み合った水脈からたった一つの水を取り出すような描写は思考を具現化したものと受け取ることもでき、面白い。改行箇所も水を買った勢いのまま口火を切った姿を思い浮かべることができる。

チェロの弓立てかけたまま滅ぶ星

秋山颯汰朗　群馬県

終わるときはいつだって何かは途中のままになる。すべてを完了させるまで待って

もらうことなんてできない。そうして途中になったものに私たちは時間や心を感じ取る。共に滅ぶしか道のないもの。運命に燃やされる弓の命の輝きが、見ていないのに眼裏に残る。

おもいでに火を灯したら蛇花火　　塩見　佯　　沖縄県

美しいと思っていたのに。蛇花火は、火を付けても決して綺麗とはいえない姿を現す。どんな思い出にせよ、再び取り出すより大切に仕舞っておいて、時々見返すくらいがちょうどいいのだ。美しくもなく戻らない後の空虚を生きるより。